

平成 22 年 4 月 19 日現在

研究種目: 基盤研究 (C)

研究期間: 2007 ~ 2010

課題番号: 19520206

研究課題名 (和文) 米国社会と文学が歴史化する「男らしさ」: 「戦争後」を生きる「奇形の男性像」研究

研究課題名 (英文) Historicizing American Manhood: A Study of Deformed Masculinities.

研究代表者

久保 拓也 (KUBO TAKUYA)

金沢大学・学校教育系・准教授

研究者番号: 80303246

研究代表者の専門分野: 英米文学

科研費の分科・細目: 文学・英米・英語圏文学

キーワード: 男性性研究、アメリカ文学、ジェンダー研究

1. 研究計画の概要

本研究は、米国社会および米国の文学作品を考察するため「男性性研究 (Masculinity Studies)」の視点を援用し、これにより明らかになると思われる様々な「奇形の男性像」の問題を考察するものである。これを通じ「男性とはどのような存在か」という普遍的で、同時に現代的な問題の解決に補助金支給期間を通じて、取り組むものである。

2. 研究の進捗状況

この研究は「資料の広範囲な収集とその徹底的な調査」、「学術的発展に向けての成果発表」、そして「学術的業績の実践的価値の発信」の三つを柱として行うものであり、「男性性の歴史化」を通しての文学・文化研究の可能性を大きく発展させるものとなる。研究期間を通じ、国内外の専門家向けの学会や学術雑誌、あるいは書籍を通しての、さらには学生・一般市民向けの講座などによる、成果発表を研究の進展と同時に継続的に行ってきた。

当研究は、米国、および米国が生み出した文学作品における「男らしさの奇形」の考察を大きなテーマとする。当初から米国の大学図書館等に協力を仰ぎ、理論的書物や19世紀当時の雑誌や書籍等の出版物を精査し続けている。構築する理論の実践に関しては、19世紀の米国文学を主な対象とし、その中でも最大の影響力を持った作家、マーク・トウェインとその作品において行っている。トウェインの作品に登場する男性は、あるものはその時代の肯定的な側面を体現する存在と取り扱われるが、多くは時代に対応できずにあきらめてしまった落伍者たちである。男性性研究の観点から、彼らを肉体的、あるいは精神的な「奇形の男性像」と取り扱うことで、今まで顧

みられてこなかった文学的な価値が、特に不人気であるが故に読まれてこなかった作品に、認められることが明らかになった。

現在まで、当研究は成果を広く発表してきた。特筆されるべきは、平成 21 年度における、米国の学会での研究発表である。当研究は、ジェンダー研究、特に男性性研究が文学研究にもたらす最先端の成果として米国研究者にも高く評価されている。

3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している。

(理由)

今回の補助金交付期間を通じ、当研究はおおむね当初の目的通りに進んでいると考えている。

研究の成果は 2008 年度までは国内の学会でのみの発表となっていたが、2009 年度には米国での国際学会で発表し、研究者から評価を受けることが出来た。また、同じく米国の研究雑誌に論文を投稿し、評価を仰いでいる。

研究者などの専門家を対象とするのみならず、当研究の成果は、研究代表者が勤務する金沢大学における講義、講演や、所在地の石川県における講演、講座など様々な機会に活用が求められており、これも想定され手痛、重要な成果であることを述べておきたい。

4. 今後の研究の推進方策

今年度もこれまでの方法を進め、研究の進展を随時、瓦解での研究発表や雑誌論文、書籍等で発信していくこととする。

平成22年度は、米国の学会及び学会誌でこの研究の評価を問うことを主とする一方で、

日本国内の学会、学会誌等にも積極的に成果を発表していく。米国での発表として、11月に開催されるSouth Atlantic Modern Language Association の年次大会における研究発表を予定し、現在、発表アブストラクトを作成中である。この研究発表は、今年死後100年を迎えるトウェインが現在の文学・文化に与え続けている影響を、男性性研究の観点から考察するものとなる予定である。

また、当研究の中心的なテーマの一つである、「男性性の奇形を産出しつづける、米国に特有な『男性化教育』」を19世紀米国文学に見る試みの研究論文を、評価が高く、また最も当研究の課題に適切であると考えられる米国の雑誌、*American Literary Realism* 誌へ投稿し、今年度中の掲載を目指すこととしている。

日本国内における成果発表に関しても、すでに3つの予定がある。学会関連としては、日本英文学会の中中部支部シンポジウムでの研究発表がすでに決まっている。これは「機械(特にロボット)」を英米文学がどうとらえてきたか、4名の若手研究者がそれぞれの視点から論ずるもので、「男性性の奇形」に注目する、当研究の成果が大きく寄与することが期待できる。

また、学会以外でも、金沢大学が主催する学生および一般市民向けの2度の講座において、この研究の成果を還元する機会がすでに与えられていることも記述したい。当研究はいわゆる、学者・研究者向けのものに可能性を限ったものではない。文学研究と、それを通じての歴史・文化研究が広く現在の社会と関係していることを表す、求められる研究であることが示されていると考える。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 久保 拓也、宇ノ木寛文、山本祐子、辻和彦、浜本隆三、辻本庸子 「トウェインはどこにいるのか?」、第12回マークトウェイン協会大会ワークショップ「『ハドリバークを墮落させた男』を読む」報告、『マークトウェイン—研究と批評』第8号、ワークショップ報告文(共著部分を含む)、査読無、76-87、2009年

2. 久保 拓也 「『大衆』をノが見る: 19世紀米国大衆文化とマーク・トウェイン」東北英文学会(日本英文学会東北支部)第62回大会 Proceedings 所収、査読無、152-159、2008年

〔学会発表〕(計3件)

1. Kubo, Takuya. Turn Us into Real Men: Mark Twain and His Incomplete Masculine Education. The Sixth International Conference on the State of Mark Twain Studies. 2009年8月8日、Elmira College (New York, USA).

2. 久保 拓也 「トウェインはどこにいるのか?」日本マーク・トウェイン協会第12回大会ワークショップ「『ハドリバークを墮落させた男』を読む」2008年10月10日、西南学院大学

3. 久保 拓也 「『大衆』をノが見る: 19世紀米国大衆文化とマークノトウェイン」東北英文学会(日本英文学会東北支部)第62回大会シンポジウム、2007年11月18日、山形大学

〔図書〕(計1件)

1. 久保 拓也 「男を作るものは何か—サミュエル・クレメンズと男らしさの病」、『文学研究は何のため: 英米文学試論集』(長尾輝彦編著・北海道大学出版会)所収、223-237、2008年